



厚情のパーズ

0334

暗黙のルール

「ただいま。」と声をかけること。
これは僕たちの暗黙のルール。
「おかえりなさい。」と遠くから、でも確かに聞こえる君の声と、
草木の匂いは僕にとって帰宅の合図だ。

太陽の厚意

猫の鳴き声をする。彼は多くの元へは来ないで、家の足元をくぐる。でもぼくから逃げているわけじゃない。太陽とかくれんぼをしているらしい。優しいかくれんぼだ。

控えめの廊下

この家は生きている。
ふとした時に、聞こえてくる音がある。軽快な音、どすんとした音、ばたばたした音。この廊下を渡る時、少し期待してしまう音がいる。今日はどんな音が聴こえるかな。そんなことを考えていたらまた聴こえてきた。ぼくはこの音の虜だ。

優しいノート

夜は温かい。
家の中だけ自然の中にいるような空気に包まれ、いつもより優しくなれる。ここで綴っている日記はなんだか自然と優しくなる。嬉しくて、ときどき読み返したくなるんだ。

僕だけのプール

今日はおとなりさんに褒められた。
シャムプーの香りはぼくのこだわりだ。でも実はそれだけじゃない。お風呂の時間はぼくにとって特別なものなんだ。湯船で歌う歌声、シャワーの音、湯船で水に触れる音、そんなものを眺める時間をぼくは噛み締める。大勢の人がいるプールではこういった些細な音は拾えないし、小さな変化にも気がつくことができないだろう。でもぼくの家の浴室はそんなものの全部が独り占めできるんだ。

遊遊のプール

ぼくの家には自慢の場所がある。でもそれはぼくたちのためではないものだ。馬鹿げているようだが、ぼくはそこに建築の優しさを感じている。だからぼくは好きだ。ここから感じる人の気配がもしかしたら実在しない虚像かもしれないけれど、そうやって世界を見つめるのが好きなんだ。人がいてもいなくても温かみを感じることができるとこの場所がぼくに与ってはひとつの居場所。

建築の香り

空気の流れを覚えてくれる。草木の匂いを覚えてくれる。太陽の光を覚えてくれる。まだみたことのない、きつとみることのない景色を、このチムニーは覚えてくれる。ぼくはこの壁を、この風を、この光を信じている。ぼくには本当のことはわからなくても、それが本当だということがわかる。それはきっと、この家のおかげだった。

あどがきー

この物語の主人公は盲目の夫婦である。
人が得る情報の0割から1割を占める視覚情報を受け取らない人だからだ。一般的に、情報が報告者の主観を排した客観的な内容である時、その意味は受け手次第で無数に生まれるものである。しかし私たちが道を歩いても、電車に乗っていても、何をしても主観的な視覚情報に踊らされている。その結果情報は誰かの主観によって意味を制限されてしまっている。これは現代の住宅にも言えることで、標準化された建築からは情報はほとんど変わらず、それゆえにその意味もまた制限されている。建築が誰に対しても応える標準物としてでなく、誰かに対して応えるものであることで、多くの意味を生み出すものとなる。そこで、主観的な視覚情報に踊らされない、目の見えない人を主人公とし、彼らに届けられる建築を目指した。目の見えない人の視点から見つめると、今とは違うものが見えてくる。

触れて触られる。それは建築と人がお互いに応じあうことである。世界の感じ方、見え方が広がり、豊かな暮らしが生まれるのではないだろうか。

